

腹部造影CTでは上腸間膜動脈本幹に高吸収域を認め、同部での造影剤の途絶が確認された。上腸間膜動脈血栓症の診断にて経カテーテル的血栓除去術を実施、本幹血栓は除去され、腸管膜の血流は回復した。術中腸管内への血管外造影所見を認めコイルによる止血術を実施。コイル近傍に血腫の発生を認めるものの保存的に縮小が観察され第18病日に退院となる。その後、総合診療科に通院。腹部の違和感、食後の腹痛を訴え、るいそうの増悪認めた。対象療法を行うも改善なく、2012年2月消化器内科に精査依頼となる。臨床症状、経過より腸管狭窄が疑われ、CO2送気後CTにてコイル近傍の限局性の腸管狭窄が確認された。狭窄部を腹腔鏡補助下小腸部分切除し、腹部症状は消失した。病理所見は全層性の線維化を認め慢性の虚血性変化が示唆された。

#### 4 超高齢者（90歳以上）に対して腹部緊急手術を施行した2例

木戸 知紀・須田 武保・寺島 哲郎

日本歯科大学医科病院外科

今回、我々は90歳以上超高齢者に対し腹部緊急手術を施行した2例を経験したので報告する。

〔症例1〕95歳、男性。2004年7月にS状結腸軸捻転を発症し緊急手術を行った。術中所見にてS状結腸軸捻転・右鼠径ヘルニア・進行胃癌を認めた。全身状態を考慮しハルトマン手術のみを行い手術を終了した。術後4日目に右鼠径ヘルニア嵌頓を認め、緊急手術を施行した。22病日に進行胃癌に対し幽門側胃切除術を行った。術後合併症はせん妄・痴呆の進行を認めたのみで53病日に退院したが、4か月後老衰にて永眠された。

〔症例2〕90歳、女性。2010年12月に大腿ヘルニアに伴う腸閉塞症を発症し緊急手術を行った。10病日に肺梗塞を発症、抗凝固薬投与にて治療を行った。右下腿部深部静脈血栓を認め、25病日にIVCフィルター留置術を行った。その後は経過良好であり49病日に退院した。

#### 5 当院における高齢者（80歳以上）緊急手術症例の検討

渡邊 直純・島田 哲也・池田 義之  
林 達彦

厚生連村上総合病院外科

【はじめに】高齢化に伴い高齢者の緊急手術も増加傾向である。今回我々は当院における80歳以上の高齢者に対する緊急手術症例について検討した。

【対象と方法】2007年3月～2012年3月までの5年間に当科で緊急手術を行った80歳以上の45症例を対象とした。これらの症例の手術病名、術式、併存疾患、術後管理、予後を検討した。

【結果】平均年齢86歳、男女比は20：25、手術病名は腹膜炎が17例、術式は結腸切除術＋人工肛門造設術が9例、ヘルニア嵌頓が17例、術式はヘルニア修復術が13例で腸管切除を要したのは3例であった。次いで絞扼性腸閉塞が7例で全例腸管切除を要した。併存疾患が1つ以上ある症例は44例で、2つ以上ある症例は25例であった。術後呼吸器管理を要したのが7例でうち離脱できたのが2例であった。術死は2例で、在院死は6例であった。

【結語】緊急手術時には全身状態は通常よりも悪化し、術前評価も不十分で、耐術性の判断に迷うこともあるが、救命のために必要な手術は行うべきである。

#### 6 豊栄病院における高齢者腹部緊急手術症例の検討

富山 武美・佐藤 一喜・齋藤 六温

厚生連豊栄病院外科

豊栄病院で平成14年4月から平成24年3月までの10年間に豊栄病院外科における手術例は2058例あり、80歳以上の手術例は236例であった。この内外科受診後24時間以内に手術を行った症例は32例認められた。年齢は81歳から95歳、男女比は10：22であった。疾患別に見ると